

【第120回生涯教育講座】

ポリファーマシーの現状と問題点

なお 直 良 浩 司

キーワード：ポリファーマシー，高齢者，PIMs，薬剤総合評価調整管理料・加算

1. はじめに

最近、「ポリファーマシー」という言葉を耳にする機会が多くなっている。ポリファーマシーとは、多くの薬剤が一人の患者に対して処方されている状態と理解されているが、単に処方薬剤数が多いことが不適切ではない。一般に多剤併用は高齢患者で生じやすく、高齢患者を対象としたポリファーマシーに関する研究が多く行われている。本稿では、高齢患者におけるポリファーマシーの問題点に関する研究を概説し、当院における実態調査の結果を紹介しながら、今後のポリファーマシー対策の方向性を考えてみたい。

2. ポリファーマシーの問題点

ポリファーマシーの問題点は多くの論文で報告されている。米国において、クリニックおよび病院の救急外来において治療された薬物有害事象のリスク因子が調査されているが、年齢が高くなるに従ってリスクが上昇し、65歳以上の群では若年群と比べてオッズ比が2倍以上となることが示されている。加えて、処方薬剤数も薬物有害事象に

よる受診のリスク因子であり、1~2薬剤を処方されている患者を対照とすると3~4薬剤群は1.4倍、5薬剤以上では1.9倍となると報告されている¹⁾。当然ではあるが、多くの種類の薬剤を併用すると薬物相互作用のリスクは増大することになる。Doanらは、5種類以上の薬剤を処方されている65歳以上の患者275名について、処方薬の内容を調査し、薬物代謝酵素CYP450が関連する薬物相互作用が生じる確率を算出した²⁾。図1に示すように、少なくとも1つのCYP関連薬物相互作用が生じる確率は、5~9種類の薬剤を服用している患者で50%、10~14種類では81%、15~19種類では92%、そして20種類以上では100%に達するとしている。このように多種類の薬剤を服用している患者においては、薬物相互作用が生じる可能性が高まり、薬理作用の増強・減弱による有害事象の発現や治療効果の減弱が生じやすい。また、ポリファーマシーが高齢者の転倒・転落のリスクとなることが、わが国における調査で示されている。Kojimaらは、高血圧、脂質異常症、糖尿病、骨粗鬆症などの慢性疾患を有する65歳以上の高齢者で、少なくとも1ヶ月以上は処方変更がなく、定期的に受診している外来患者を対象として、処方薬剤数と転倒スコアあるいは開眼片足立ち持続時間との関係を調べた。その結果、いず

Kohji NAORA

島根大学医学部附属病院薬剤部

連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1

島根大学医学部附属病院薬剤部